

10年後、持続可能な伊野 79人が熱い話し合い

10年後の伊野を考えるフォーラム（話し合いの広場）が10月7日、伊野コミュニティセンターで開催され、79人の住民が農業や結婚など9つのテーマに分かれて話し合った。次回は11月8日、午後7時半から、著名なコミュニティデザイナー山崎亮さんを迎えて伊野コミュニティセンターで開催される。



情報発信について話し合うグループ

まちづくり推進のための情報発信 課題について勉強会必要

自治協会が今年呼びかけたフォーラムは今回で三回目。初参加は二十八人、若者から高齢者まで幅広い年齢層が集まった。四十代〜五十代の参加が多いのが心強い。しかし、女性の参加者は二十二人とやや物足りない数字となっている。一度でも参加したことのある人は累計一三四人に達した。

参加者から提案された話し合いのテーマは、空き家活用、農業、結婚、道路周辺の草刈、伊野暮らしの困難、教育、健康診断、情報発信、ちよんぼし伊野いちの九つ。

グループに分かれて話し合い、内容を報告しあった。それぞれに共通していたのは、情報発信と課題についての勉強会の必要性だ。学ぶことで現実を深くつかみ、自分たちで課

題解決に当たろうという機運が生まれることが期待される。

十一月八日のフォーラムでは、これまでの話し合いの内容を発表し、講師・山崎亮さんからアドバイスをもらうことになっている。また、「一つのテーマについてみんなで考えるフォーラムが必要」という声があるので、教育や農業、伊野暮らしの負担軽減といった緊急性のある課題を一つに絞った話し合いを自治協会が準備することになった。

自治協会は、十年後、安心して住みやすい伊野をつくるための総合計画（ビジョン）をつくる作業を進めようとしている。成功の鍵は、どれだけ多くの人びとが参加するかである。

あしたのまち・くらしづくり活動賞 伊野地区 総務大臣賞

公益財団法人あしたの日本を創る協会とNHK、読売新聞社が主催する「あしたのまち・くらしづくり活動賞」の発表が10月5日、NHKと読売新聞で報道された。

内閣総理大臣賞には、空き地を借りて農園を整備し、育てた野菜を空き家の軒先に設けた直売所で販売するなどして地域の活性化に取り組んだ東京都東久留米市の「氷川台自治会」が選ばれた。

総務大臣賞には、小学校の統合計画をきっかけに、小学生が産直市に参加するなどまちづくりと教育をつなげた活動を展開している「伊野地区自治協会」が、また、内閣官房長官賞には、海外から来るなどして日本のことばや文化になじめない子どもたちに日本語教室を開くなどの学習支援を行っている大阪市天王寺区の「こどもひろば」が、それぞれ選ばれた。

農業グループの報告

急がれる農業者が話し合う機会

離農に伴い米づくりを請け負う農家は畦畔の草刈が大変。地主に費用や労力を負担してほしいという声もあるが、それができないから請負に出しているという実情もある。草刈隊を創設して地区内外から草刈体験や草刈ボランティアを募集してはどうか。

耕作放棄地対策として、狭くて機械が入らないなど条件の悪い農地には、そこに適合する作物を見つけたすことで農地として維持することを考えたい。

農業は儲からない。農機具も高い。兼業の時間もとれない。担い手確保のために、機械の使い方や栽培方法についてアドバイスを受けることができる機会をつくってはどうか。

とにかく、農業者が話し合う機会をつくるのが一番急がれる。

地域を守り、創る気概

出雲市役所平田支所 筑後正博

多くの方々が参加され、また、たくさんの若い方々がいらっしやり、とてもびっくりしました。

そして、和やかに自由闊達な意見交換ができたことは、やはり、伊野地区の良き風土と言いましょうか、「変えていこう！」精神が芽生えつつある表れではないでしょうか。

とかく「まちづくりビジョン」や「フォーラム」、<地域イベント>については、作成や開催がその目的となってしまう、実行し終えれば、万事を尽くしたかのごとく、当初描いていた意図を見失いがちになってしまいます。

では、何がその目的や目標にふさわしいのだろうか？といつも考えます。

私の想いは、それぞれ思考が違う者同士が、互いの意見や主張を認めつつ、地域を考え、地域を守っていく気概を醸成することです。

<フォーラム>や<地域イベント>等の開催が、参加者の、【情報の共有】と新たな【気づき】や【学び】のきっかけとなり、地域を共創する人々の拡大につながればよいと考えます。

「地域」を守る人を育む→「伊野まるごと学舎」の実現
そういう伊野地区になればと、私は期待します。

伊野マリンド（女子ジュニアバレー） 今年2回目の県大会出場

小学校区単独でチーム編成することが困難な状況になっている県下の小学校スポーツ。伊野小と灘分小児童で編成する伊野マリンド（岩成正美監督）が今年2回目の県大会とな

る「ゆめユメタウンカップ」に出場した。決勝トーナメント進出は逃したが、懸命なプレーに観客席の応援力がこもった。



▲対三刀屋戦

第3回 まちづくりフォーラム案内

講師 山崎亮氏

コミュニティデザイナー、国語教科書「町の幸福論」著者

日時 11月8日(木)午後7時30分～

場所 伊野コミュニティセンター

持続可能な伊野 テーマ別討論 とまごまな提案

空き家活用

増加する空き家対策は伊野地区の取組課題の一つだ。空き家をIUターナーの住宅にし、まちづくりにつなげる方法もある。

しかし、リフォームにはお金が必要。県・市の助成制度についても調べてみる必要がある。空き家バンクなど行政の窓口は出雲市縁結び定住課だが、大きな成果はあがっていない。今年、NPO「ひらた空き家再生舎」（平田）が立ち上がり、空き家情報を集めている。

自治協会の空き家調査（7月）によると地区内の空き家は二十三軒。家主の意向を確認したうえで、どんな活用が可能かを考えたい。空き家を活用して、まちづくりを推進する人たちのたまり場ができるという。そして、まちづくりの事務局ができればいい。

空き家活用については、家主の意

向はもちろん、不動産業者や土地家屋調査士等の知見を得ることも必要だ。また、活用だけでなく、空き家周辺の草刈や墓の管理など、付随する問題も多い。一連の問題について勉強会を開催したい。



▲伊野暮らしについて話し合うグループ

伊野暮らしの負担軽減

町内の世帯数が少ないと、役職や当番がすぐまわってくるなど負担が大きい。町内合併となると町内が持っている資産や近隣関係など問題は多いが、次世代に負担をかけないためには、そうも言っておられない。

まちづくりを推進するためのリーダー育成。全員がリーダーと考えてみる。リーダー登録をして、「こういうことに困っている」ときは、すぐに支援やアドバイスを受けられるようにしてはどうか。

いろいろな問題が山積する伊野地区のまちづくりを効果的に進めるために、福祉や教育などテーマをしばってみんなで話し合う機会をもつてほしい。

結婚

結婚とあととりは別。本人同士の合意が一番。あととりにこだわると結果的に婚期をのがすことになる。

昔は世話やきさんがいて縁結び役を務めていた。現代版の世話役として、県が「ハピコ（ハッピー・コイデイナーター）」制度を設けているが、個人情報保護という問題もあつ

て苦労している。

出合いの場をつくるのが大事だが、企画は若い人が担うことが望ましい。現代版の青年団をつくれなものか。ワンコイン飲み会など魅力的な取組を企画してはどうか。

道路周辺の草刈

ウォーキングやジョギングをしていると道路周辺に生えている草がじやまになる。なんとかならないか。

草が生えている、落ち葉がたまっているという情報をまず共有することが大事だ。消防や体協といった町内を越えた組織で連絡をとりあつてはどうか。草刈体験をホームページやSNSで募集してはどうか。

教育

伊野ベーション（島大教育学部学生と一緒に伊野の自然を舞台に子どもの遊びをつくる活動）をもっと広げたい。地域の人びとの参加を促すために参加しやすい日時設定や活動内容を考える。また、地区外の子ども・保護者の参加を実現したい。そうすることで、小規模校児童の社会性やコミュニケーション能力を高め

ることにつながるのではないか。

小学生のときは地域の活動に密着するが、中高となると部活等で忙しいため、地域と疎遠になる。中高大生の時期に伊野のまちづくりにどう関わるか検討する必要がある。

高校受験対策学習会は続けてほしい。また、伊野児童館の開館時間延長も検討してほしい。

健康診断

がん検診100%をめざして。若い時から徹底した検診が重要。そのため、地域内の声かけ運動が大事。地区内の健康推進委員やピンクリボンアドバイザー（乳がん）や看護師の連携を考えてみたい。

認知症検診等、医療の診断を受けることが必要だが、病院へ行くための交通手段が問題である。生活バスを全便、下川橋経由にしてみたい。

ちよんぼし伊野いち

家庭菜園の余り物を軽トラ市で売る試み。すでに、2回の話し合いをして準備を進めている。十一月十一日（日）開催のトレイ

ル・ランの時、ゴール後十二時の間、伊野小学校庭で試行する。トレイルラン参加申込は約百人。ランナーやその家族・地域住民を対象に販売する。

生産者が直接販売することを原則とする。生産者と消費者のふれあいを大事にしたいから。商品は100円単位の価格設定をしていた。きたい。

情報発信

伊野に関心をもってくれる人びと（関心人口）を増やしたい。IUターも増やしたい。そのためには、情報発信が必須である。特にSNSを使った情報発信が効果的だと思えるが、発信方法がわからないので、とりあえず勉強会を開催したい。そして伊野の魅力やイベント開催等、情報発信する人を増やすことが大事。

SNSだけでなく紙情報等、世代を配慮した伝達方法も考える必要がある。年内に、初心者向けの情報発信勉強会を開催する予定になっている。

課題解決 人びとの繋がりで

多久和 暁子

初めて「伊野まちづくりフォーラム」に参加しました。どんな雰囲気なのか不安もありましたが、テーマごとに分かれてグループで話し合い、意見を聞いていると共感できる点が多々あり、自分の意見もしっかり聴いていただけて楽しくなってきました。

伊野で生活しはじめて15年。これまでいろいろな面で地域と関わってきましたが、あらためて伊野の将来に向けて沢山の課題があるということがわかりました。今までやってきたことも時代の流れ等で難しくなったり、出来なくなったり…。改善していかないといけない時期に来ていると思いました。

まずは、テーマを1つとりあげて少しずつ改善していけるように、もっと沢山の人のアイデアを聞いてみたいと思いました。時間はかかるとはありますが、より良い伊野、魅力的な伊野をめざして自分も積極的に協力していきたいと思っています。いくら便利な時代になっても人との繋がりは大事にしたいと思いました。

多様な情報発信でまちづくり

門脇 まゆみ

私は情報発信グループに参加しました。メンバーで話し合っていると、フェイスブックやインスタなどの存在は知っていてもその使い方がわからないメンバーがほとんど。最新の情報を多くの人に発信するにはSNSを利用しない手はありません。そこで、まずは、メンバーがその使い方や利便性を学ぶ勉強会を開催しようということになりました。

また、年配の方はやはり紙ベースで情報を提供してあげることが有効です。その他、テレビや新聞なども効果絶大です。

これらのことからSNSとチラシ、新聞やテレビなどを上手く組み合わせることがより多くの人びとに情報を伝えるのに効果的であるという結論に達しました。何のため、だれのために情報を発信するのか。伊野の魅力は今住んでいる住民の方はもとより、まだ見ぬこれからの伊野ファン獲得のためにも発信していけたらと思います。

地区外から応援

伊藤 延夫

私は伊野で生まれ育ちましたが現在は斐川町で暮らしています。「健康な身体がキレイをつくる」をモットーに、えごまを生産・販売しています。

伊野では地域発展のために様々なイベントが開催されており、その都度、声をかけていただき、参加するようになりました。

今年3月、伊野小の卒業式に声をかけていただきました。卒業して何年もたっているので新鮮な気持ちで参加できるのではないかと思います、返事をしました。当日はワクワクしていましたが、なんと、たった5人だけの卒業生で寂しさを感じました。その1ヶ月前、伊野の将来を考える授業の一環として児童による発表会が行われました。児童のみなさんと地区の皆さんが結束して、よりよいまちづくりに取り組まれていることに感銘しました。

生まれ育った町です。発展を目的とした会にはできるだけ参加したいと思います。微力ではありますが精一杯協力していきたいと思っています。